町の文化財あれこれ　其の六十五

中井町・弥生文化の頃（縄文から弥生へ）

縄文時代、中井地区の人々は境・松本上・遠藤原などの台地上で竪穴住居に住み、家族単位で狩猟・採集によって定住生活を送っていました。弥生時代に入り、中井の縄文人の暮らしはどのように変化していったでしょうか。

弥生時代とは紀元前千年～紀元三百年の頃です。一八八四年、東京本郷弥生町の向丘貝塚で発見された壺に「弥生式土器」という名がつけられ、そのことが一八九八年に発表された後、この土器を使用していた時代を「弥生時代」と呼びました。今現在は水稲農耕を主とした生産経済が始まり前方後円墳が出現するまでを「弥生時代」と呼んでいます。

最古の水稲農耕遺跡は佐賀県唐津市「菜畑遺跡」の他、福岡県博多区「板付遺跡」に見られます。これらの水田遺跡から、堰・水路・畦畔などの灌漑技術が完成された形で大陸から伝来したことが分かっています。

北九州を中心に伝搬した水稲農耕はその後中国・四国地方に伝わり、紀元前六世紀には近畿・東海地方に広がりました。紀元前四世紀の津軽「砂沢遺跡」、紀元前三世紀の青森県「垂柳遺跡」の発見で、東北地方でも水稲農耕が行われていたことが分かってきました。ところが関東地方では水稲農耕の伝搬が東北地方より遅く、全国的にも最も遅れました。

一九五二年小田原市の毛織物工場跡地（現ダイナシティ・ウェストモール）に弥生時代中期の竪穴住居跡（一〇二軒）や水稲農耕跡などが発掘されました。この「中里遺跡」の発掘により、紀元前三世紀において関東地方西部で水稲農耕が定着したことが初めて確認されました。この遺跡では関東地方特有の「須和田式土器」と呼ばれる坪型土器が多数出土している他に「瀬戸内系土器」（凹線模様が多い土器）も出土しています。ところが「瀬戸内系土器」は中部地方や東海地方では発見されていないことから、瀬戸内地方より船などでこの地域に渡った人々が、直接その技術を伝えた可能性が指摘されています。また「中里遺跡」に見られる集団の編成方法や運営など社会制度にも畿内の影響が指摘されており、近畿中央部からの入植によって文化の扶植（植え付け拡大）が図られたことが分かっています。その一方で、秦野市上大槻の「中里遺跡」では、弥生時代前期の長野県小諸市「氷遺跡」から出土した「氷Ⅰ式土器」と呼ばれる土器が見つかっています。中井町においても境の「東向遺跡」で、弥生時代前期の東海地方で作られた「樫王式土器」といわれる土器の一部が出土しています。このように中井町やその周辺の地区では、畿内だけではなく、他の地域の影響があったことも分かります。

弥生時代の後半、中井町の弥生人は従来の狩猟・採集生活を中心に、他地域との交流によって弥生文化の一部を取り入れながら、生活様式も少しずつ変わっていったようです。大井町の「中屋敷遺跡」から出土した弥生時代前期の土器にはアワ、キビ、イネの種実圧痕が検出されていることから、中井町でも狭い湿地状の平地でこれらの作物を混作し、僅かの食料生産を行っていた弥生人が存在した可能性もあります。

秦野市中里遺跡
氷Ⅰ式土器

中井町東向遺跡
樫王式土器

小田原市の「中里遺跡」周辺では、環濠集落跡も見つかっていて、これが小国家の形成につながっていったと考えられています。やがて中井町もこのような勢力下に組み込まれながら、水田の整備も進んで、本格的な水稲農耕を始めていったのかもしれません。そして日本はその後の古墳時代を迎えることになります。

（文化財保護委員　廣澤瀧男）（資料提供・神奈川県教育委員会所蔵）